

## 虹

## 奇しき縁つなぐ翻訳



翻訳を手掛けたアウグスティヌス  
著作集を手にする松崎さん

## ⑬ アウグスティヌス著作集と研究者人生

四畳半の書斎はストイックな迫力がある。三方の壁を選び抜かれた本が覆う。つつましい広さの部屋の中央にも本棚が鎮座する。哲学に宗教、文学の書籍が静かに呼応し合う。「これでもかなり処分したんですよ」窓に面した机で富山大名誉教授の松崎一平さん(69)＝富山市＝は笑う。

松崎さんは中世哲学の研究者だ。専門にするアウグスティヌスは、古代末期ローマ帝国の地中海世界に生きたキリスト教哲学者。世界史の教科書にも登場する「三位一体」などの教義を確立した。後世に大きな影響を与えたことから「西欧の父」とも呼ばれる。死後1600年近くを経ても思想は生きる。バイデン米大統領の就任演説でも、その言葉が引用された。

松崎さんはこの書斎で大切な仕事を完遂した。それは1979年に刊行が始まった『アウグスティヌス著作集』シリーズ(教文館)を締めくくる翻訳だ。著作集はアウグスティヌスの主要な著作を全30巻と別巻2巻で日本語化するというもの。その記念碑的な訳業が多くの研究者の協力の下、半世紀かけて続けられてきた。松崎さんがバトンを受け取り、アンカーになった。

翻訳したのは『詩編注解』という大著だ。神を賛美した詩150編から成る『詩編』という旧約聖書の一書を基にしたアウグスティヌスの説教や解説をまとめる。ラテン語の底本は3冊、2200ページ以上に及ぶ。松崎さんが関わった日本語版は6冊に分けて構成する。他の研究者と分担し、松崎さんは終盤の132編から150編まで担当した。松崎さんの訳文を収めた一冊は6月に『詩編注解(6)』として刊行された。研究者待望のシリーズ完結だった。

◇

小学生の頃、小遣いで湯飲み茶碗を買うほど器に関心があった。生まれ育った大分は小鹿田焼の産地。民藝ブームの熱を浴びた。そのまま陶器の美に惹かれて美術史を勉強しようと、京都文学部に進んだ。

麻雀卓を囲むうちに関心は移ろった。哲学に興味を持った。器も魅力的だが、生きるとは何か考えなくなった。アウグスティヌス研究の第一人者として知られる山田晶さんのゼミに入った。アウグスティヌスが赤裸々に半生を明かし、信仰に生きる道のりを振り返った『告白』を原語で読んだ。

ゼミの輪読のペースは遅い。しかし、奥

深かった。学生が一文ずつ翻訳すると、山田さんが哲学や神学、歴史の見地から解説してくれた。例えば、アウグスティヌスが使ったラテン語版の聖書はもちろん、ギリシア語やヘブライ語のものまで引っ張り出し、思想の流れを読み解いてくれた。「一言一句をゆるがせにしない読みからは字面だけでは見えないものが浮かんできました」

山田さんの持論は「速くたくさん読まなくてもいい。でも、しっかり深く読むこと」だった。ラテン語が子どもの頃から身近なヨーロッパ人と日本人の間には差があっても仕方ない。キリスト教の知識も乏しいから、つまづくこともあるだろう。代わりに一語ずつ丁寧に読み解くからこそ発見できることもあるということだった。

『告白』は面白かった。「時間とは何か。



「薄暮」西治子

誰かに尋ねられなければ、自分は知っていると思う。しかし、問われて説明しようとすると、それが分からなくなる」。アウグスティヌスは時間について深く考えていた。時間を絶対的な枠組みとして捉えず、人間の精神の中に見出すという視点が新鮮に映った。松崎さんは卒論を「アウグスティヌスの時間論」というテーマで書いた。詩や小説を書き、同人誌も作った。たばこをくゆらせ、編集者を志したこともあった。しかし、当時はオイルショックの真ただ中。採用試験の狭き門をくぐるのは難しい気がした。それ以上にアウグスティヌスをもっと読みたかった。そのまま山田門下に残り、研究者の道を歩むことにした。

◇

大学院で学び始めた頃、著作集の刊行が始まった。まだアウグスティヌスは『告白』

のような代表作しか日本では知られていない時代だった。山田さんに学んだ研究者の先輩も訳者に名を連ねていた。翻訳の苦労と共に「これは君たちのような若い研究者につなげていくような仕事だ」と語ってくれた。まだ本格的な研究の緒に就いたばかり。ラテン語がおぼつかない初学者からは遠く壮大な話に見えた。

晴れて大学教員になった。公募に応じ、富山大に採用された。当時はまだ哲学系の教員も充実していた。意見を交わし、研究に集中できた。自分が学生の頃に打ち込んだように、学生と共に『告白』をゆっくり丁寧に読んだ。

40代になり、学務でも忙しくなり始めた94年。山田ゼミの先輩研究者から連絡を受けた。著作集に加わる『詩編注解』を翻訳

に集った聴衆に『詩編』を説いたものだ。神への感謝や祈り、信頼、畏れが感情に訴えかける言葉で連なる。修辞にたけたアウグスティヌスは聴衆の心をつかむため、リズムカルに文章を重ね、結論的な文章を繰り返していた。松崎さんは息遣いを再現すべく、原文の語順とリズムに則して訳した。

訳文と共に時間は積み重なった。大学を2019年に退職し、研究室を引き払った。既に担当した分は終えていたが、他の担当者分の7編もさらに引き受けて翻訳。既刊分の索引なども加え、960ページもの大著になった。ポストに入らない厚みのゲラを4回も校正し、校了したのがこの5月だった。

発行元の教文館社長、渡部満さん(72)は「感無量です」と松崎さんにメールを送った。渡部さんは長年編集者として著作集に関わった一人だ。「アウグスティヌスを哲学的に関心を持って読む日本人研究者はいても、宗教学的な視点で読む人は少ない。でもそれでは中途半端。松崎さんたちの『詩編注解』が研究の大きな窓になる」

◇

著作集完結の記念パーティーが開かれたわけでも、大きな新聞記事になったわけでもない。変わったことといえば松崎さんの書斎に分厚い1冊が加わったくらいだ。

哲学などの人文学は逆境の中にある。「選択と集中」を旗印に大学改革が進む。長期的な視点よりも今すぐ役立つ実学を求められる。著作集はお金や効率からは遠い。時代に逆行するようなプロジェクトだった。松崎さんは「社会がどうであろうと、アイデンティティーと結びつく仕事ができる。若い研究者の手がかりになったらうれしい。新しい視点でアウグスティヌスを再発見する人も出てくるかもしれない」と話す。

著作集刊行の歴史は、研究者人生とほぼ重なる。小さな書斎で今もアウグスティヌスの研究を続ける。

アウグスティヌスは『告白』の中でこうつづる。「私の書くものに目をとめるものが、たとえごく一部にすぎないとしても、とにかく人類に向かって話しているのです」

さまざまな取材で人生の転機についてお伺いすることが多いです。松崎さんの場合は『告白』という本でした。4世紀に異国の地で書かれた本です。それが読み継がれ、日本の青年の人生に大きく影響を与えたと思うと、古典の持つ力に驚かされます。松崎さんが翻訳した本も誰かの人生に影響するのかもしれない。



## 「虹」第8巻 販売中

最新刊の第8巻「虹 誰もいないから両手を広げた」は、北日本新聞連載の141～160回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50  
北日本新聞社西部本社「虹」係  
FAX 0766-25-7773  
mail niji@kitanippon.jp  
次回掲載は10月1日(日)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作/北日本新聞社  
メディアビジネス局